

専門学校1年生における学業成績と心理的要因の関連性

—入学前を含めた8か月間の追跡調査より—

専 攻 人間発達教育専攻
コ ー ス 教育コミュニケーション
学 籍 番 号 M 1 1 0 1 5 F
氏 名 和 田 敏 江

1. 問題と目的

本学院における過去4年間の中退率調査によると毎年10%前後の学生が中退をしており、その半数が1年次で中退していることと、中退の理由の多くが学業不振であることが分かる。なぜ、早期中退を選択したり学業不振に陥ったりするのだろうか。

本研究では、1年次の早期の段階で学業不振に陥らないことが中退者を減らす、つまり、学校を辞めさせず卒業させることへの解決策の要因になると考えた。また、これまでの先行研究より、中退の主要な要因が、学業不振であるが、同時に他の要因との相互作用も中退に影響していると考えられる。そこで、1年生における学業成績と心理的要因がどのように関連するのか検討する。その際、心理的要因としては、まず第1に自己効力感が関連し、そのほかの要因として動機づけと理学療法士（以下、PTとする）になりたい気持ち及び職業イメージなどの職業意識も関連するのではないかと考える。よってそれらについて、入学前を含めた8か月間の追跡調査をすることとした。

2. 方法

(1)調査協力者：2012年度入学が決まった新入生88名のうち、3月中に調査できた新入生84名（男性65名、女性19名、平均年齢23.67歳±4.81）と、2年生68名（男性55名、女性13名、平均年齢25.56歳±4.26）。

(2)調査時期：2012年3月～2012年10月。合計4回の調査を実施。第1回は入学前の3月中。

第2回調査は5月下旬。第3回調査は7月下旬。第4回調査は10月中旬。2年生は、第4回調査のみ実施した。

(3)調査内容：志望動機、職業イメージ、学業自己効力感、実習自己効力感、動機づけを質問紙により調査。学業成績は、1年次前期の中間試験・前期試験の結果を使用した。なお、中間試験は第2回調査と第3回調査の間、前期試験は第3回調査と第4回調査の間に実施している。

3. 結果と考察

(1)学業自己効力感と学業成績との関連性

先行する学業自己効力感と学業成績との関連性及び学業成績とその後の自己効力感との関連性を検討した。その結果、先行する学業自己効力感と学業成績との間には有意な差が認められたが、学業成績とその後の学業自己効力感との間には有意な差は認められなかった。先行する自己効力感が高ければ試験の結果は良好であるが、試験の結果が良くても悪くてもその後の自己効力感が高まっていないということである。よって、試験の結果が出た後でも学業自己効力感が高められるような支援の必要性があると考えられる。2年生との学年間の比較では、2年生の方が自己効力感が低く、自己効力感と職業イメージの関連性が認められたが、動機づけ得点が低いわけではなかった。むしろ、実習を経験した上での自己効力感であると考えられるため、より適切な低下した自己効力感であると考えられる。

(2) 動機づけと学業成績との関連性

動機づけに関しては、量的な側面からと質的な側面から学業成績との関連性を検討した。まず、量的な側面を学校生活を頑張ろうという気持ちとし、学業成績との比較を行った。その結果、第1回及び2回調査の頑張ろうという気持ちと中間試験及び前期試験の結果との間には有意な差が認められ、入学前及び入学後2か月の頑張ろうという気持ちと学業成績との関連性が明らかとなった。しかし、前期試験前及び後期に入ってから頑張ろうという気持ちと前記試験の結果の間には有意な差が認められなかったことから、前期試験直前の頑張ろうという気持ちが高いからといって前期試験の結果に関係するとは言えない。次に質的な側面として、Deci&Ryan (1985) の自己決定理論に基づき作成された岡田・中谷 (2006) の大学生用学習動機づけ尺度を用いてスタイルの分類を行った。その結果、3つのスタイルに分かれた。同一化と内発という2つの動機づけが相対的に高い自律スタイルと、外的の高さで特徴づけられる外的スタイルと、全体的にすべての得点が低く、動機づけの低い低動機づけスタイルの3つである。そして、それらと中間及び前期試験の結果との比較を行った。その結果、いずれの試験の結果ともに、内発的と同一化的動機づけで学習が行える学生の方が、他の動機づけのものと比較して高かった。また低動機づけと外的動機づけでは、有意な差は認められなかったものの、低動機づけよりも外的動機づけでの学業成績の方が低い得点を示した。

先行研究では、学習意欲は外的動機づけによって引き起こされた結果であり、外発的な動機づけが内発的動機づけに変わっていくということであるため、外的動機づけの傾向の高い学生に対しての個別的な支援により内発的動機づけに変わっていくような促しが必要であると考えられる。

(3) 職業意識と学業成績の関連性

職業意識をPTになりたい気持ち及び職業イメージのそれぞれに分け、それぞれと学業成績との比較を行った。その結果、いずれの要因ともに学業成績との間に有意な差は認められなかった。しかし、職業意識と学業自己効力感との間、また学業自己効力感と学業成績との間には有意な差が認められたことから、PTになりたい気持ち及び職業イメージが高ければ、学業自己効力感を介して学業成績が良くなると考えられる。

4. 総合考察

学業成績に一番影響するのが、学業自己効力感であり、動機づけの質であることが明らかとなった。より良い動機づけを高めるために自己効力感を高めることが必要であり、よりよい動機づけのためには自己効力感を高めることが必要であるなど、それらは互いに関連しあうものであった。そして、その自己効力感を高めるためには、自律的な学習が求められる。このことから、本学院における教育体制を見直すことが必要であるし、学生支援・教育を行う上での一人一人の教員の学生へのかかわり方を見直すことが必要であると考えられる。本学院では学生の動機づけを高めるために行っているチューター制学習システムに対する見直しが必要である。一人一人の学生の能力を面談を通じて行き、何が足りてなくて、どのようなことを伸ばすべきなのかを明らかにした上で、学生個人に応じた学習動機づけを促す必要がある。学生の自律的な動機づけのために、学生が興味を示しそうな情報の提供も必要であろう。また、試験の結果を生かしたフィードバックを行うことで、学生自身で自己評価をする習慣をつけさせることで、「自分でもやればできる」という自己効力感を高めさせる支援を行っていく必要があると考える。

主任指導教員 中間玲子
指導教員 中間玲子